

政泊郷土誌

工藤浄真

利尻郷土史研究会々長

(〒097-03 北海道利尻郡利尻町仙法志字本町)

1. はじめに

昭和63年度より利尻町内の各集落を取り上げて研究調査をしその結果を報告してきたが、本年度は政泊（マサンドマリ）について報告するものである。この報告についての内容は調査の限界また資料不足等の事情により困難があつて十分なものとは言えがたい。特に、開拓移住の年代についての調査には多くの困難があり、推定推測の域を出ないものがある。しかし、仙法志地区内の他の集落に比較して開拓移住の年代が幾分か早いと考えられる資料も若干ではあるがみられる。

政泊は西に隣接する神磯と東に境界を接する本町(旧マオヤニ)との間に位置する。約1.5km程の東西間の小集落で仙法志地区ではやや小さい集落である。

この地区の居住者の殆どは、これまで報告してきた他の集落と異なり、当初からの移住者がそのまま住みついていることである。勿論、利尻島内の他地域からの再移住者も多いが、杓形地域からの再移住者は少ない。

生活圏は既報告分の集落とは変わらない。

集落形成の経緯は姻戚、地縁により集団化され出身県ごとにグループ化しており、定住率は他の

集落に比較して高い。

生活様式及びその労働内容等については他の集落と同じであり、家屋及び他の建築物等は殆ど戦前の物はなく、新改築されている。

2. 地域

(1)地名地形並びに気象

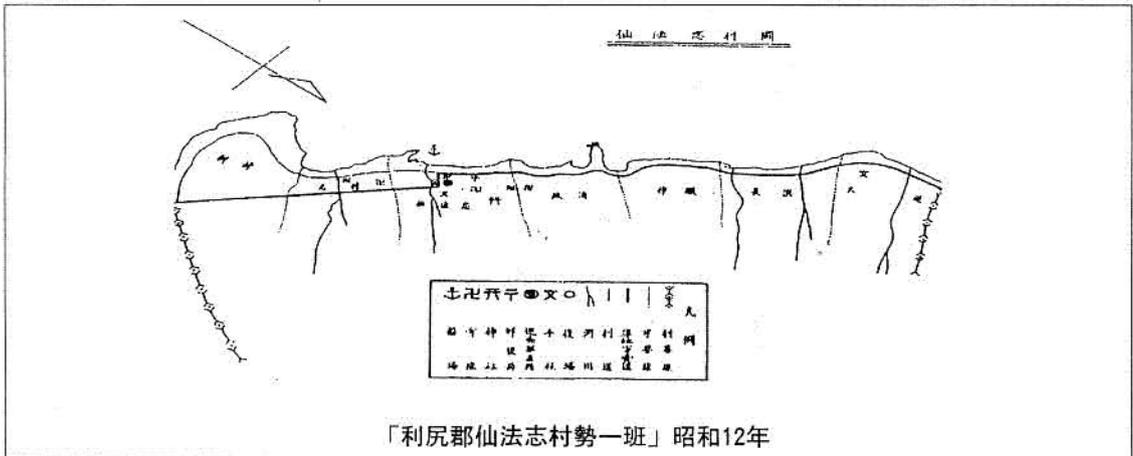
現在の集落名は「旧マサンドマリ」に由来し、「北風を避ける澗のあるところ」を意味していると言われている。地域の範囲は東端の宮下昭一氏宅周辺の五軒町から西端の湾土（ワンド）の小集落である。道路は町道のみで海岸線に沿っており、一般家屋は道の山側に並立している。

地形は長浜地区に類似しており、沢が四カ所で川はない。また、海岸は東の宮下の澗から仙法志漁港、そして今井の澗に至っている。山麓に至るまでの森林及び丘陵の状況は他の地区と同様である。

昨年に自治会館の近くに道々に連結する道路が完成し、東端には本町山ノ上に通じる昔からの町道坂道がある。

気象条件は他地区に比較して余り変わらない。

(2)移住年代とその経路



開拓移住の年代は隣接の神磯と同年代と考えられるが、鬼脇の遠藤儀八郎氏が政治に出稼ぎし鯨定置漁業を営んでいたのが明治初頭であることはほぼ間違いない。明治二、三年に至って初めての資料によると、この時代に急速に出稼ぎ、寄留者及び開拓移住者が増加したと考えられる。その経路は他の地区と同様の者もいるが直接に上陸来島して居住した者、他地区に転出した者のいることは特徴的である。この地までの経路は島全体の移住者と殆ど変わらないが、一部他集落にない特色がある。神磯と同じ資料に基づいての出身県別の移住者で政治は167名であった。即ち、秋田県36名、青森県28名、三重県20名、石川・岩手・福井県は各9名、富山県は7名である。三重県出身者が目立ち、海女の存在が見受けられる。

(3)生活の様子

四季を通じての生活の様子は既報告の集落と同様である。

昭和50年に簡易水道が完成し各家庭に敷設された。それまで飲料水として利用された井戸は「つるべ井戸」から「ポンプ井戸」に移り、塩分の極めて強いものであった。また、旧坪田の澗の海辺に湧水の井戸があって重宝がられた。

他には道路交通は町道のみでバスが通行する以外は他集落と変わらない。治安及び医療についても第9集で報告した通りである。

(4)仙法志漁港について

遠くは明治36年に漁港築設請願有志相談会に始まり、大正13年には船入澗築設村民大会の開催となり、そして漁港船入澗築設期成同盟の結成となってホッケ澗か伊藤の澗かと大きな論争が展開された。ようやく意志統一がなされて昭和9年3月7日、仙法志村長中山康次の名を以て宗谷支庁長に設計申請書と理由書を提出し、字政治21番地を候補地としたのであった。工事に着手したのは昭和13年からで工費8万2千円を投じた。更に土地の寄付を受け村費負担額2万5百円で用地を整備したものである。

現副港として利用している澗は岩石に負われて二、三カ所の「くぼみ」で水が溜まっていたところを爆破し手作業で掘った。それが漁港へのスタートの澗である。

戦時中の中断もあったが戦後も漁港への猛運動を展開しつつ工事は続けられた。その結果、昭和

26年6月に第四種仙法志漁港の指定を農林省から受け、昭和27年7月に本格的着工となったのである¹⁾。

第一期工事から第三期工事の西新防波堤の完成は35年後の昭和61年10月であった。漁港指定までは今では考えられないような工法で原始的な工事であったことは周知している。従って工事の安全を願って毎日の作業前に近くの岩場の祠に無事を祈願したという。慣れない地元の青年達には何人も負傷者が出た難工事であったのである。

仙法志の存亡をかけた大事業は実現したが地元漁業の振興は計画通り行っていない。漁港完成までの間、道開発仙法志漁港修築監督員詰所(四名配置)が置かれていた。

2. 産 業

(1)漁業

この集落内には三者三カ統乃至五カ統の鯨定置漁場と番屋があって、うち二者は有力な漁業であった。他の漁業はどれも同様である。漁権及び譲渡人そして借受人の変動は二者は余りなく、うち一者は良好な場所でなかったために不安定であった。

次にこの集落内の鯨漁業経営者の氏名を列記してみた。

	17号	19号	21号
大正3	龍野 芳雄	坪田伊三郎	種田 鶴吉
大正7	石川 重吉	坪田伊三郎	種田 鶴吉
昭和17	宮下 要一	坪田 正二	大森寅三郎
昭和23	宮下 要一	坪田 正二	大島虎次郎

表1 政治における鯨定置漁業者の推移

* 鯨定置の番号は昭和23年のものである。

第21号は明治3年に遠藤儀八郎の漁場を譲渡され最盛期は三カ統経営した。昭和2年6月に種田氏は死去し親類の渡辺氏経営に当たったが昭和12年に大森氏に譲っている。第19号の坪田氏は明治10年代後半に鬼脇村来泊(ラエドマリ)に漁場を開

き、明治20年後半に当地に新場所として経営し次いで子息の正二氏が譲渡を受けて最後までこれに当たった。同氏は出稼ぎ漁業者で漁期終了後福井県に帰り留守を加茂氏に任せていた。

種田氏は種田の澗、坪田氏は坪田の澗を利用し天然の良き澗で大規模なものであったが、これが一つの条件となって今日のような仙法志漁港の基礎となった。第17号はあまり恵まれた漁場でなく絶えず経営者も変わり休業もあったところである。澗は田中の澗とも呼ばれており、ほぼ昔の原型を保っている袋澗で現存している。第17号と第21号は昭和6年発足の合同漁業会社に加入したが、第19号の漁場経営者は加入せずに個人経営を続けた。

(イ) 漁場の位置

第17号は多くの経営者の変動で袋澗の名称も変わったが現在の宮下昭一氏宅前の澗であり、現に一般漁民に利用され番屋もここにあった。第19号は現在の船揚げ場のところで山側に鯨番屋がありその浜は坪田の澗といわれた。多くの倉庫や建物があって規模が大きかった。第21号は現冷蔵庫前の澗が種田の澗の船入澗でその東側に袋澗があった。番屋は道路の山側にあり、現在も網倉が残っている。

宮下の袋澗は政治55番地にあり、現在再修築工事が進められている。種田の澗は旧政治5番地、坪田の澗は政治54番地と444番地であった。

後者二つ澗については現漁港に至るまでの紆余曲折が多かった。昭和26年6月に第1種漁港に指定されるまでの幾多の問題については「船入澗・袋澗の調査研究 中間報告その二」(1986 利尻郷土研究第3号)を参照されたい。

(2) 商工業

商工業といってもこれに従事した者は専業者ではなく殆どは何らかの形で漁業者であった。大正末期から昭和の初期にわたって天塩との対岸商易が行われた。岡山久三郎氏の久宝丸、玉村添次郎氏の声問丸、古川留吉氏の伊勢丸、荒川弥一氏のうさぎ丸、笠谷昌太郎氏の和合丸から長栄丸があって、一隻四人程の乗組員の船であった。

商品は木炭、薪材等から雑穀などの取引で政治は勇壮果敢な気質の人々がいた。その全員ではなかったが時には余市や樺太に航行したこともあったという。天塩への航行時間は順風満帆の場合は三日間、風向の悪い場合は一昼夜から二日間、東風

の時などは焼尻までも避難したことがあったというから大変な荒技であった。借用した袋澗は種田の澗や坪田の澗で一つの澗に二隻程で場合によっては沓形港まで回航していた。

昭和初期中過ぎ景気状況の悪化が進み、焼玉エンジンの動力船となった。それが長栄丸で投資家のよろしきを得て昭和12年頃まで続いた。

ここで報告する帆船の帆は北前船に見られるような帆ではなく、帆に工夫改良されたもので帆の取付け方も他の帆船とは違う。伸縮する仕掛けになっている。これを裏付ける写真が近年岡山勇氏によって発見されている。それは天塩港に入港中の仙法志帆船団で札幌の元天塩在住者からのものといわれている。なお、それらを証明するもの一つとして船名楯とその模型がある。

風呂屋は政治に二軒あったのは大正時代のものである。五軒町の大森辨次郎氏と現峨家菓子店のところの井田金蔵氏の経営するもので何れも「つるべ井戸」で塩分が強かった。

詳細不明であるがこの近所にソバ屋、春日氏の「三島屋」という料理屋があったという。

商店では中島覚次郎、日高市松、宮下信作の三氏で日用雑貨商のようである。加茂氏は以上の人達の後に戦前から戦後にかけて商店を営んだ。昭和30年の後半に加茂氏が転出してからは、森井氏が商店を営んだが、やはり森井氏も今から5年程前に転出した。また、湾土(ワンド)の笠原商店も4年程前に転出し、現在では峨家菓子店が残るだけとなった。

桝屋は沢田、大島、山本であったが桝屋根から鉄板屋根に移り変わっていくなかで桝屋は廃業し変わって現在は大島屋根鉄板業、川合板金屋の二軒がみられる。

西島・本田両氏の先代は石屋であった。盛況だったのは大正時代で澗、墓、石碑を取り扱った。

鍛冶屋では櫛引氏が湾土で昭和15年まで、両和田氏は鍛冶屋と表具屋であったという。

商店では漁協購買部の今日の存在は大きいものがある。

3. 行政組織

(1) 自治会役員

政治における行政組織は、これまで報告してきた仙法志村内の他の集落と同じで特に変わってい

るところはない。

政治地域の歴代部長区長自治会長は表2の通りである。また戦時体制強化にともなう部落会組織を昭和17年2月1日で見ると表3の通りである。部落選出の村会議員経験者を中心として体制が固められていることがわかる。

現在の政治の自治会役員は、自治会長・副自治会長・会計・第一班長・第二班長・第三班長・第四班長で構成されている。また、自治会内には体育協会、森林愛護組合、PTA、消防、漁協、漁協婦人部、納税貯蓄組合、水難救済会、神社世話掛りなどの役員が決められておりそれらに係わることは自治会で協議決定され執行されている。

自治会館の運営はもとより、平成2年6月には住民協議の結果、政治港神社を多額の寄付金を拠出して自治会館山側に創立した。

(2)公職者

当地から選出された公職者氏名は次の通りである。

1. 総代人村会町会議員

(イ)総代人

出村友次郎 明治24年から仙法志村開村まで

(ロ)旧仙法志村村会議員

種田鶴吉 明治37年4月～明治44年3月、大正3年4月～大正13年8月24日、大正15年4月～昭和2年5月23日

日高宇之松 明治37年4月～明治44年3月

中島覚次郎 昭和3年5月22日～昭和7年5月21日

田中多吉 昭和3年5月22日～昭和7年5月21日

加茂善蔵 昭和7年5月21日～昭和11年5月21日

玉村添次郎 昭和11年5月22日～昭和20年4月29日

宮下要一 昭和15年5月22日～昭和22年1月30日

	氏名	就任年月日
1	種田 鶴吉	明治35年4月 ～昭和2年5月23日
2		昭和2年5月24日～昭和7年3月31日
3	田中 多吉	昭和7年4月 ～昭和8年5月28日
4	森 勇次郎	昭和8年10月24日～昭和11年3月31日
5		昭和11年4月 ～昭和15年12月20日
6	加茂 善蔵	昭和15年12月21日～昭和19年12月31日
7	中島覚次郎	昭和20年1月1日～昭和20年12月31日
8	玉村添次郎	昭和21年1月1日～昭和21年12月31日
9	山元 桃治	昭和22年1月1日～昭和23年12月31日
10	滝沢 利助	昭和24年1月1日～昭和24年12月31日
11	古川 留吉	昭和25年1月1日～昭和25年12月31日
12	浜口 祐蔵	昭和26年1月1日～昭和31年12月31日
13	森 次助	昭和32年1月1日～昭和32年12月31日
14	山元 桃治	昭和33年1月1日～昭和38年12月31日
15		昭和39年1月1日～昭和47年12月31日
16	藤井庄太郎	昭和48年1月1日～昭和54年8月4日
17	宮下 昭一	昭和54年8月5日～現在

表2 歴代部長区長自治会長

役職名	氏名	摘要
会 長	加茂 善蔵	村会議員 学務委員
総務部長	宮下 要一	村会議員
教化部長	中島覚次郎	村会議員
産業経済部長	近藤藤太郎	
警 防 部 長	滝沢 利助	警防団政治部長
衛 生 部 長	三盃 元吉	
森林防火部長	宮道惣太郎	
銃後奉公部長	浜口 信助	政壮組組頭
経 理 部 長	和田 勇蔵	
第一班長	三盃 元吉	隣保班々長
第二班長	前田 清	〃
第三部長	前田 助松	〃
第四部長	宮道惣太郎	〃
第五班長	藤井庄太郎	〃

表3 政治部落会役員名簿 昭和17年2月1日選任

藤井庄太郎 昭和22年4月30日～昭和32年5

月30日（*昭和22年4月からは普通一般選挙による村会議員）

古川 留吉 昭和26年4月30日～昭和32年5月30日

(イ) 利尻町会議員

駒井十一郎 昭和53年10月8日～昭和60年3月19日（任期途中で死去）

2. 方面委員、戦後の民生委員

加茂 善蔵 昭和7年3月1日～昭和23年6月30日、昭和23年7月～昭和26年6月30日

宮下 要一 昭和26年7月～昭和30年11月6日

浜口 コト 昭和28年11月30日～昭和49年11月30日

藤井ヨシエ 昭和49年12月1日～昭和55年11月30日

浜口 孝 昭和55年12月1日～現在、平成2年10月から利尻町社会福祉協議会会長

3. 学務委員及び教育委員

種田 鶴吉 明治39年～大正11年

加茂 善蔵 昭和5年～昭和12年

宮下 要一 昭和27年11月1日～昭和30年11月6日

藤井庄太郎 昭和32年～昭和 年

4. 固定資産評価審査委員

宮下 要一 昭和26年9月22日～昭和30年11月6日

5. 農業委員

西島 留吉 昭和22年7月21日～昭和29年7月20日

藤井庄太郎 昭和29年7月16日～昭和32年7月15日

4. 産業経済団体

(1)仙法志漁業協同組合

明治年代からの仙法志漁業組合と水産組合は戦時中は漁業会と改称され、戦後に新制度による漁業協同組合と発足して現在に至っている。当初、事務所は学校道路の旧公民館跡にあったが昭和22年新設の冷蔵庫を改築し事務所を併設移転した。

昭和42年9月20日発生火災により一時的に旧郵便局舎を間借りした。そして組合長井田定勝氏の構想に基づいて昭和43年9月に現在地に事務所を新築した。請負業者は稚内市の石塚建設株式会

社である。

当自治会からの組合の歴代役員は次の通りである。

理事 種田 鶴吉 明治32年4月～昭和2年5月

組合長 種田 鶴吉 期間不明

理事 加茂 善蔵 詳細不明

理事 浜口 信助 期間不明

理事 宮下 要一 期間不明

理事 三盃 元蔵 昭和33年4月～昭和38年3月

理事 長谷川 清 昭和38年4月～昭和41年3月

監事 浜口 勝 昭和41年4月～昭和44年3月

理事 浜口 勝 昭和44年4月～昭和57年3月

理事 藤井 庄二 昭和57年4月～現在

戦前戦後にかけて不明部分があり、また、理事を選出しなかった期間もあったといわれている。

また、仙法志漁業協同組合の青年部長には当地区の滝沢薫氏が就任している。

(2)森林愛護組合

戦前かある組織で、何度か名称が変更された。昭和17年以前は不明であるが、当地区からの役員は次の通りである。

政治森林防火部長

宮道惣太郎 昭和17年2月1日選任

古川 留吉 昭和18年12月31日選任

政治組合長（村評議員）

古川 平作（仙法志森林愛護組合副組合長）

政治副組合長

高松 政雄（仙法志森林愛護組合評議員）

政治組合長

五十嵐作太郎

齊藤 良一（現在役員）

(3)納税貯蓄組合

戦後新しく組織されたもので、納税を円滑にすることを目的としている。各集落二単位以上とし仙法志地区連合体とした。

政治地区の納税貯蓄組合の役員の歴史的経過は次の通りである。

政治第一組合

組合長 前田 清

副組合長 長谷川 忠
理 事 高松 政雄
監 事 山本 実治
監 事 岡山 勇
監 事 三孟 元藏

政治第二組合

組合長 山元 桃治
副組合長 浜口 信助
理 事 浜口 勝
監 事 前田 助松
監 事 本田 一郎

政治第三組合

組合長 滝沢 利助
副組合長 藤井庄太郎
理 事 牧野 富藏
監 事 大島 信一
監 事 後藤 惣作

以上の役員は殆ど死亡または転居している。現在の役員は次の通りである。

政治第一組合長 鈴木日出博
政治第二組合長 浜口 勝
政治第三組合長 大島 浩一

5. 消防団体

旧仙法志村内団体としては各集落とも同一である。政治集落における消防団体の歴史的経過は次の通りである。

仙法志村政壮組

政治地区の青年団体として明治45年1月6日発足した。消防活動も目的の一つとしてある。初代団長は笠谷昌太郎で組員は50名いた。

仙法志消防団

大正2年仙法志村一円の組織として発足した。初代組頭は種田鶴吉で昭和2年5月まで務めた。政治からは小頭がでていたが不明である。

仙法志警防団

昭和10年10月10日改称された。歴代の政治部長は次の通りである。

滝沢 利助 昭和17年2月
浜口 祐藏 昭和17年12月
浜口 祐藏 昭和18年12月

仙法志消防団

昭和22年改組され、当地区は神磯とともに第四分団となった。この第四分団長に当地区の

山本実治が昭和33年11月から昭和52年3月まで就任した。

利尻町消防団

昭和31年仙法志村杵形町の町村合併により誕生した。当地区は第四分団第三部として位置付けられた。当地区からは次の役員が選出されている。

利尻町消防団副団長

山本実治 昭和52年4月1日～昭和56年5月31日

宮下昭一 昭和63年2月8日～現在

利尻町消防団第四分団長

山本実治 昭和33年11月15日～昭和52年3月31日

浜口 孝 昭和63年12月17日～現在

利尻町消防団第四分団第三部長

山本実治 昭和25年5月31日～昭和31年6月17日

宮下昭一 昭和60年10月1日～昭和62年3月31日

浜口 孝 昭和62年4月1日～昭和62年9月1日

鈴木日出博 昭和62年9月2日～昭和 年 月 日

牧野明男 昭和62年9月2日～昭和 年 月 日

現在、第四分団第三部の団員は7名であり、連絡員には三孟重雄氏が就任している。また、消防器具置場は浜口孝氏宅前にあって昨年改修工事が行われた。

消防組織としては戦前に森林防火組合があったが戦後の制度改正によって発足した消防委員制度により、藤井庄太郎氏が一時その任にあたった。

6. 文化団体

(1)青年会

この地域の青年団体の組織化は仙法志村の他地域に比べて比較的遅い方であった。結成は明治45年1月5日である。目的の一つに体育養成があり柔道が奨励された。また当時盛んであった剣道でも他を圧倒する活躍があった。また青年会は地域の消防、水難や災害の救援活動も行っていった。発足当時は正会員賛助会員合わせて50名の会員がいた。大正9年にそれまでの各部落ごとの青年会が

仙法志村青年団として一つにまとめられ、各部落ごとに分団がおかれた。これは途中で仙法志青少年団として改組された。戦後は各部落ごとに青年会がおかれ、それらの連絡協議会として仙法志村連合青年会が組織された。しかし昭和40年代前半あたりから活動が下火になり消滅してしまった。

特筆すべき活動は、昭和3年11月3日今上天皇の即位記念として「御大典記念」碑を政壮組が仙法志神社に建立寄進している。揮毫は種田鶴吉、石工は西島藤太郎である。また政壮組では政治神社坂道の石垣積みの奉仕作業も行われた。

戦後の昭和28年、宮下昭一会長時代に青年会館として間借りしていた建物が狭くなったため、政治森林愛護組合長古川平作氏を通じて沓形泉町にあった営林署の倉庫を5万円で譲り受け使用した。この倉庫購入資金不足のため薪材の払下げ、拾い昆布、労働奉仕などで資金を集め、苦勞しながら待望の青年会館の実現にこぎつけたものである。

この青年会館は昭和48年、藤井庄太郎自治会長時代に改築され、三回の工事を経て現在に至っている。現在の自治会館の基礎には青年会館当時のものが今でも使われている。

歴代の役員は次の通りである。

政壮組

初代会長 笠谷昌太郎
二代会長 浜口仁之助

仙法志村青年団政治青年分団

初代分団長 中島覚次郎
二代分団長 宮下 信作
三代分団長 宮下 要一
四代分団長 中谷 治司
五代分団長 山本 実治
六代分団長 熊田 善吉

仙法志青少年団政治分団

初代分団長 岡山 勇

政治青年同盟会

初代会長 岡山 勇
二代会長 近藤 利弘
三代会長 藤井 庄二
四代会長 宮下 昭一
五代会長 山元喜代治
六代会長 後藤 良一
七代会長 牧野 明男

また仙法志村連合青年会会長に当地区から岡山

勇氏と近藤利弘氏が二代、三代にそれぞれ就任している。

(2)婦人会

この地区の婦人会も他地区と同様に経緯、活動内容、役員選出方法において変わりがない。

戦前の婦人会の当地区からの役員は次のものの氏名がみえる。

国防婦人会

監 事 宮下 要一（昭和11年3月11日～）
班 長 加茂 ヨシ（昭和11年3月11日～）
副班長 中谷 ミキ（昭和11年3月11日～）
組 長 中島クリ、前田ツタ、宮道シマ、森タケ、滝沢サト

愛国婦人会

評議員 加茂 ヨシ（昭和13年7月1日～）
評議員 藤井 ジュ（昭和17年5月16日付）

大日本婦人会仙法志村支部

参 与 宮下 要一
審議員 加茂 ヨシ
審議員 中谷 ミキ

*大日本婦人会は国防婦人会、愛国婦人会を統合して昭和17年6月15日発足した。

戦後の婦人会は昭和20年に発足した。各地区ごとに婦人会がおかれ、その上に仙法志村婦人会があった。利尻町以後は仙法志、沓形の両婦人会が合併し利尻町婦人会が誕生した。それらの上部組織に当地区からも役員を選出していたが、昭和50年代中頃に活動の下火とともに消滅した。

役員氏名は次の通りである。

仙法志村婦人会

・発足当時

理 事 山本しゅん、前田つた、宮下きみ

・昭和23年以降

理 事 古川チエ、宮道ユキ、滝沢ミヨエ

・昭和40年12月以降

部 長 古川チエ（利婦連協理事）

理 事 宮道ユキ、滝沢ミヨエ

・昭和41年11月以降（改選により理事一名減）

部 長 藤井よし江

理 事 滝沢ミヨエ

・昭和47年12月以降（改選により理事減）

部 長 高村チャ

漁協婦人部は漁協発足と同時に創設され、貯蓄生活改善、地位向上を趣旨として現在も活動を続

けている。各部落ごとに支部がおかれている。当地区から選出されている役員は次の通りである。

仙法志漁業協同組合婦人部

二代会長 宮下キミ

三代会長 梅田ツノ

四代会長 古川チエ

仙法志漁業協同組合婦人部政治支部

支部長 中谷みどり

副支部長 川合エミ子

(3)体育協会

全村的団体で全戸加入会員組織で、一期間二年として自治会単位ごとに理事、役員を選出している。

(4)自治会館

当初は政治青年同盟会所有の青年会館であった。昭和30年代後半に青年会が消滅したため、青年会館を自治会で引受け改築を重ねて自治会館を維持している。

(5)遺族会

旧仙法志村遺族会があり、年一回慰霊祭を執行している。戦死者の遺族及び家庭で組織されている。浜口勝氏は仙法志遺族会会長を務めており、会員には浜口勝、鈴木日出博、前田ツル、中谷貞治、後藤惣一郎の五名である。死者の殆どは太平洋戦争における犠牲者で占められている。

(6)教育関係

神磯地区同様特徴的なものはない。

(イ) 保護者会並びにPTA

保護者会会長 種田鶴吉 設立当初から昭和2年まで

(ロ) 戦後のPTA

仙法志中学校PTA

副会長 夏井藤七 昭和48年から三期

副会長 高村チャ 昭和54年から二期

仙法志中学校同窓会

会長 浜口 孝 二代目会長として昭和61年まで就任

当地区からは戦後に浜口庸一、熊田アキの両先生が出て仙法志小学校に奉職した。また当地区における現在の児童生徒数は6名であり、年々減少している。

5. 人口の変化

当地区の人口の変動状況を見ると、旧仙法志村

の総人口の約8%を占めてきている。しかし過疎化減少にともなって高齢人口の割合が高くなりつつあることはいうまでもない現実となっている。老人家庭は十戸ある。

	仙法志村		政治地区	
	戸数	人口	戸数	人口
大正5年	680	3,216		
大正10年	730			
昭和10年	487	2,843	53	322
昭和13年	493	3,118	51	343
昭和17年	455	2,867	49	328
昭和25年	526	3,582	53	344
昭和30年	526	3,492	55	355
昭和35年	560	3,035	56	312
昭和40年				
昭和45年	477	2,308	67	315
昭和56年	403	1,222	42	141
昭和63年	382	1,044		
平成元年	377	986	40	101
平成2年	369	976	38	95

表4 仙法志地区・政治地区戸口推移

最も人口及び戸数の多かった大正7年代に比較するとその変動は更に拡大するが定着性は高い。

政治居住者の推移をみると出身地は越前、能登が多く、次いで秋田、津軽、南部衆がみられる。明治後半の人口動向をみると越中や三重県も同数に近い数字になっているが、昭和初期から戦前にかけて転出者が多く、三重県出身者にしても現在では子孫が二、三名居住している程度である。

来島当初は一度地縁親戚などに「ワラジ脱ぎ」をしてその後島内各地域に移って行った人も多いということから考えて、地形が好条件に恵まれていたと判断できる。

庄内、越後が少ないのは仙法志が他地域に比較して、最も遅い開拓に関係があるものと推測される。

また、越前、能登の郷里出身者は当時のその地の経済事情などが大きく影響を与えていると思われる。

政治居住者の推移は以下の通りである。

政治居住者の推移

No.	昭和15年居住者	平成2年居住者	昭和15年当時職業	出身 県	摘 要
1	宮下 要一	宮下 昭一	漁業	福井県	
2	荒川 弥一		漁業	秋田県	小樽市転居
3	高松 政雄	高松 政雄	漁業	福井県	
4	山本源太郎	山本 実治	葎屋	福井県	
5	佐藤佐太郎	高松 和彦	漁業		
6	大針 与蔵	古川 平作	宿業	福井県	
7	中島覚次郎	小林 敏男	商店	石川県	
8	三盃 元吉	三盃 重男	漁業	石川県	
9	近藤藤太郎	鈴木日出男	漁業		
10	岡山久三郎	宮下 義二		石川県	岡山氏仙法志本町に転居
11	高松彦太郎		漁業	福井県	森宅へ転居
12	西島藤太郎		石工業	福井県	死亡転居
13	平野 鶴松	峨家 豊	漁業		
14	玉村添次郎		漁業		転居
15	前田 清	前田 ツタ	漁業	福井県	
16	富田 常吉	古川 満		福井県	
17	長谷川 忠		漁業	福井県	稚内市転居
18	駒井十一郎	駒井 行郎	公務員	青森県	
19	前田 助松	前田 ツル	漁業	福井県	
20	古川 サク				死亡
21	浜口 勝	浜口 勝	水産物検査員	三重県	
22	川合 吉蔵	川合 清一	鉄板業	道南福山	
23	森 勇次郎	高松彦太郎	漁協職員		
24	浜口 信助	浜口 孝	漁業	石川県	
25	後藤 明		漁業	青森県	死亡
26	山元 桃治	山本喜代治	漁業	新潟県	
27	宮道惣太郎		漁業	福井県	仙法志本町へ転出
28	中谷 治司	中谷 貞治	漁業	福井県	
29	浜口 祐蔵		漁業	石川県	後藤明宅へ
30	金田福太郎	斉藤 良一	漁業	青森県	
31	和田豊太郎		漁業	青森県	転居
32	和田 勇蔵	夏井 藤七	漁業	青森県	
33	本多 一郎			新潟県	転居
34	加茂 善蔵	加茂 クン	商店	福井県	平野明男同居
35	滝沢 利助	滝沢 薫	漁業	秋田県	
36	沢田埋一郎	大島 浩一	葎屋	秋田県	
37	梅田長次郎	梅田辰太郎	漁業	秋田県	
38	五十嵐長作	五十嵐 桂	漁業	秋田県	
39	牧野 富蔵	牧野 明男	漁業	秋田県	
40	高村 弥作	後藤惣一郎	漁業	青森県	
41	後藤 惣之	後藤 利幸	漁業	青森県	
42	藤井庄太郎	藤井 庄二	漁業	福井県	
43	高村弥五郎	高村 秀弥	漁業	青森県	
44	大島庄五郎	大島 義信		秋田県	
45	熊田末次郎	熊田 善吉	漁業	秋田県	
46	大島 信一			秋田県	沢田宅へ
47	滝沢 利助	滝沢 利正		秋田県	
48		藤田 久市		青森県	加茂・森井居住

であった。「宮道の沢」までである。沢には宮道惣太郎氏宅で現在は本町に移転、道路沿いに中谷治司宅、浜口祐蔵、金田福太郎、和田豊太郎、和田勇蔵、本多一郎、加茂善蔵の各氏宅と並んでいて坪田番屋となる。

浜口氏宅は現在後藤明氏宅となり、金田氏宅は以前には秋田谷浅吉氏であり、現在は齊藤良一氏となり、和田両氏は豊太郎氏は転出、勇蔵氏は現在の夏井氏宅である。

坪田番屋は「坪田の沢」「稲荷さん」から自治会館までの陸や浜「澗」の範囲で十数棟に及ぶ島内においても大規模なことで知られている。

旧中田組事務所、自治会館、昨年新築の神社、給油タンクがあり、道々への道ができた。

また、前浜は漁船上架場になり袋澗は漁港に使用されて、現在では当時のもの何一つない。旧種田番屋の浜側は一時仙法志漁協事務所及び冷蔵庫（現在地）があって、その西隣に旧利礼三角航路の仙法志駅があった。現在の仙法志漁港の中核になったのは旧種田の澗と坪田澗である。旧種田番屋の西隣に旧道開発仙法志漁港修築工事監督官詰所が残っている。ここは先住民族遺跡にあたる。昭和25年に北大より考古学者が来島し貝塚を発掘調査した。

(3)ワンド

ここはワンドといわれるように細長い袋状に小湾になっていた。現在地のようになったのは昭和30年頃までに浅瀬を埋立てたものである。従って昔は道路が崖澗沿いにある家屋玄関は何軒かは横向きであった。埋立て後に現在のような家並みや道路になった集落である。大島（浩）氏宅は従来のままで梅田氏宅前に道路があった。即ち現在の家屋の裏側であり、幹線道路の両出入口の場所は変わっていない。家の数もそれ程の変わりがなく現在に至っている。

五十嵐作太郎、牧野富蔵、後藤惣一郎、向かいに滝沢利正の各氏宅があり、少し山側に離れて後藤惣作、藤井庄太郎、高村弥五郎、大島庄五郎、熊田末次郎の各氏宅で神磯へ出る道路の岩の高いところに大島別家宅があった。昔は伊藤源吉、櫛引亀太郎、戦後暫くしてであるが沢田理一郎氏等がいて、誰かがその後に住居している。櫛引氏は鍛冶屋、沢田氏は疋屋である。現在、後藤惣一郎氏は以前は高村弥作氏宅であり、その前は伊藤

源吉氏の家屋であった。大島浩一氏宅は沢田氏が居住していた家屋である。櫛引氏の家屋は現在山本氏の家屋になっている。

この地一帯の漁業者の殆どは今井の澗を利用して出漁している。

9. 風俗習慣

他の地域と殆ど変わらないが、長浜と同様に昭和30年代に至るまで部落神社を有しなかったのはこの二地区である。

大正の後半には「名刺交換」といって元旦に家の使いとして子供が名刺を持って新年の挨拶廻りに各家に歩いたという。それが現在の自治会の新年会となったといわれている。これは既調査した地域ではそのようなことは聞かれなかった。

以上の外に調査未了部分があって不明である。しかし他の地域との大差はなく類似している。地域の運営の主導権は越前、能登の出身者が多く、風俗習慣においても両者に傾斜しているように思われる。

調査した他の三地区に見られない面もあり先祖出身地的なものがあるが、表面に現れない気質がうかがわれる。

10. 主な出来事

- | | |
|----------|-------------------------------|
| 明治31年 6月 | 山火と森林の焼失 |
| 明治38年 6月 | 漁夫殺人事件と種田漁場倉庫の小火 |
| 明治33年12月 | 台風による大被害 |
| 昭和初期 | おける天塩対岸交易帆船の遭難の発生 |
| 昭和2年 5月 | 村有志者、種田鶴吉氏死去（後に何件かの不思議続出す） |
| 昭和13年 4月 | 大時化により漁夫遭難死 |
| 昭和13年 | この年から政治船入澗の工事着工 |
| 昭和22年10月 | 漁業会冷蔵庫完成 |
| 昭和27年 | 仙法志漁港着工 |
| 昭和30年代 | ワンド埋立て工事の着工 |
| 昭和30年代 | 北海道開発漁港修築事務所おかれる |
| 昭和34年 | 漁協事務所を本町から政治の漁協冷蔵庫に移転す |
| 昭和34年12月 | 旧種田番屋跡に漁協付属施設として給油タンク第一基新設される |
| 昭和36年 | 仙法志漁港西側防波堤に当地最初 |

の灯台が設置される
 昭和42年9月 漁協冷蔵庫並びに事務所（新事務所完成まで一時旧郵便局を借用し業務を執行する）焼失する
 昭和43年1月 焼死者四名を出す火災が発生する
 昭和43年9月 現在地に新事務所新築完成し借事務所を移転す
 昭和44年 漁協事務所前に水産物荷捌所完成
 昭和44年11月 滝沢 薫氏、北海道勤労青少年顕彰で表彰される
 昭和45年6月 杓形開発による作業現場にて作業中の当地区住民の死亡事故が発生
 昭和49年9月 五軒町に漁協附属施設として水産種苗センターが新築完成
 昭和50年 旧冷蔵庫跡に漁協冷蔵庫が新築落成
 昭和55年12月 自治会館の山側に重油タンク(200kl) 施設完成する
 昭和56年11月 山本実治氏、45年間の消防活動に対し「勲六等単光旭日章」が授与される
 昭和57年 テレビ難視聴家屋の共同視聴施設が完成
 昭和58年12月 漁業無線レーダー完成
 昭和59年11月 宮下昭一氏が統計調査員として30年以上、梅田ツノ氏が漁協婦人部理事並びに部長23年間の功績により利尻町から功労者賞、社会貢献賞を受ける
 昭和61年10月 仙法志漁港完成
 昭和61年12月 漁船上架施設完成
 昭和62年6月 仙法志漁港周辺道路工事着工
 昭和62年10月 西端町道から道々に通ずる道路完成する
 昭和62年10月 水産物保管施設（倉庫）完成
 昭和63年9月 東端の道路改良工事が行われる
 平成元年10月 仙法志水難救難所の建物が種苗センターに隣接して新設される

11. 終わりに

年々進む過疎化現象は歯止めがきかず、起死回生の漁港の実現された地元集落であるが、他集落と同様の方向をたどっている。

道路の改修、漁港の整備、漁協事務所の完成な

どで一変した政治であるが、地場産業の衰退、そして地域指導者の不足等で将来への方向性に乏しく、全面的総合的に或いは抜本的な変革を期さない限りその期待は薄い。

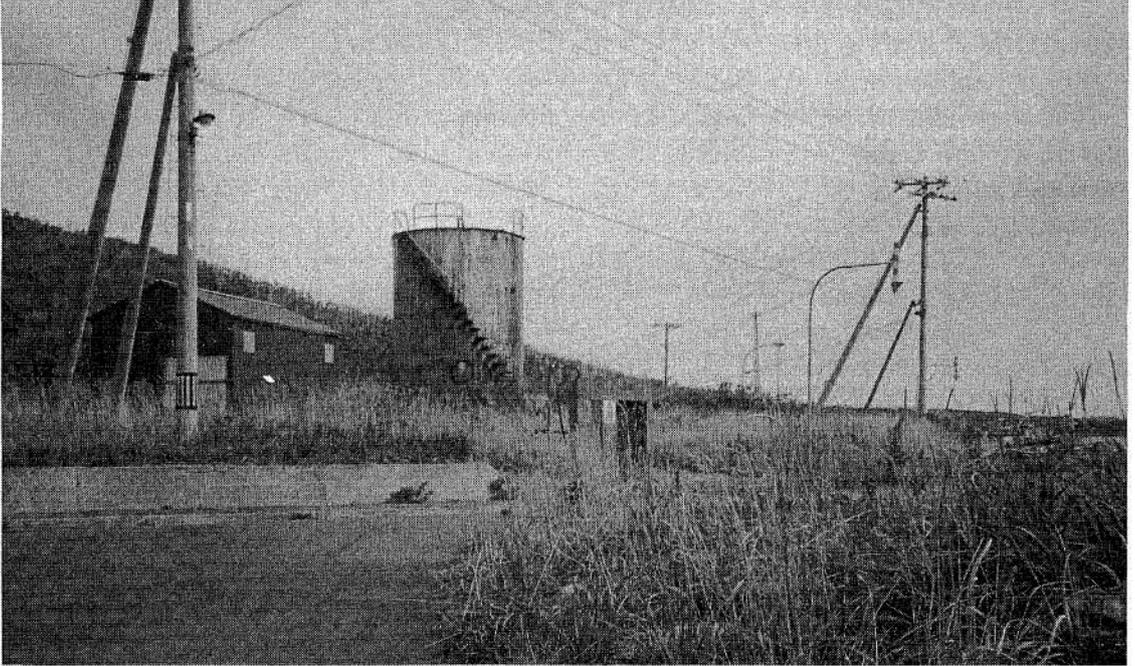
聞き取り調査に御協力いただいた方

山本実治、岡山 勇、高村秀弥、宮下昭一、
 宮下キミ、三上トミ
 利尻町役場仙法志支所
 仙法志漁業協同組合

参考文献

仙法志村役場行政資料	利尻町史編集室蔵
神社寺院明細帳	利尻町史編集室蔵
宗谷支庁管内拓殖要覧	利尻町立博物館蔵
利尻郷土研究第2号「利尻の石碑」	
	利尻郷土史研究会
利尻郷土研究第3号	利尻郷土史研究会
利尻町立博物館年報第5号	利尻町立博物館

1) 指定までの経緯、詳細について「利尻郷土研究第3号」（昭和61年9月30日発行）及び「仙法志村役場放送」（昭和22～31年5月号）を参照されたい。



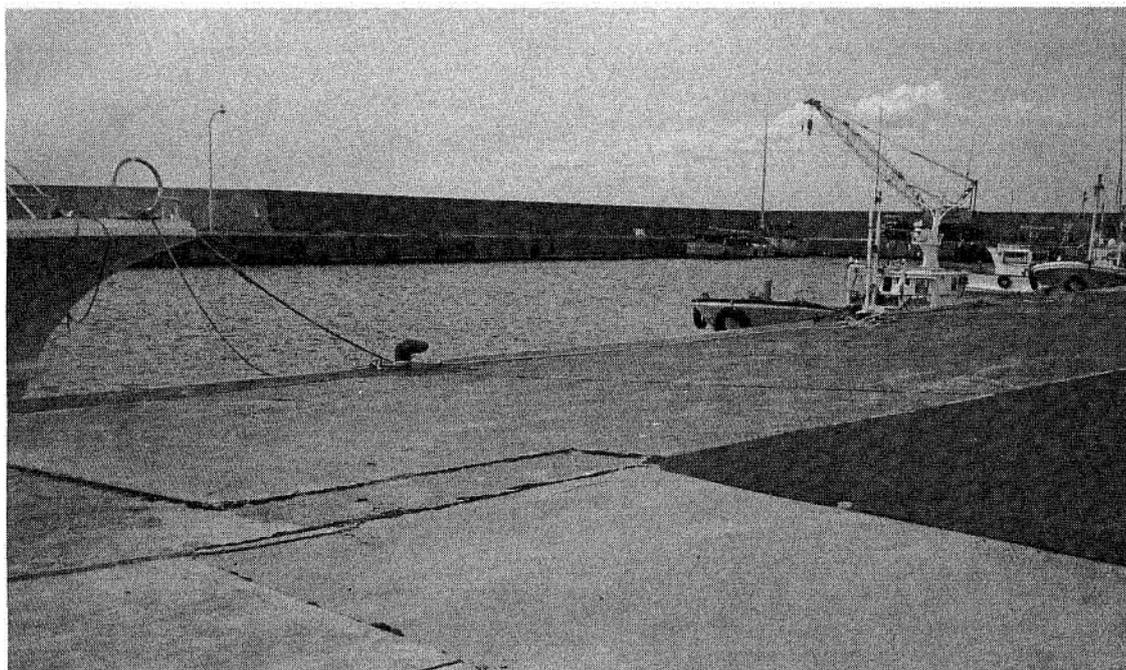
旧種田番屋跡
(漁組冷蔵庫、船入澗があり種田の澗～現船揚場が近くあった。～ 網倉が残っている。)



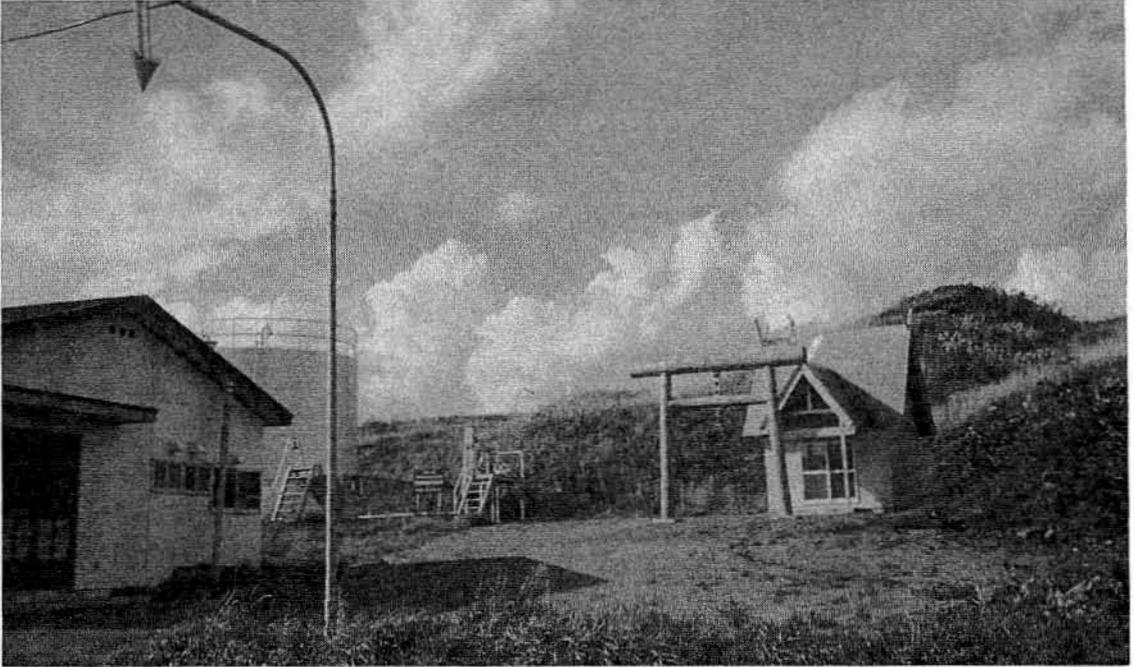
坪田番屋跡と坪田の稲荷さん
(正面の建物は漁港修築工事に当たった 旧中田組事務所で現在使用されていない)。



宮下の澗（石川の澗田中の澗とも以前呼ばれたことがあった）
この澗で10名近い親方衆が鯨漁にいどんだ。



仙法志漁港の起源となった船入澗で現在は副港として利用されている。



平成2年新建立された「政治港神社」左は政治自治会館、その向うに給油施設タンクが見える。



仙法志 漁業協同組合事務所（東側から）
（この正面に荷揚所がある）